

# ソーシャルメディアで緊密に繋がった人間関係について考える教育の試み

田中 健吾<sup>1)2)</sup>

1) 香蘭女子短期大学 情報センター

2) 香蘭女子短期大学 ライフプランニング総合学科

tanaka@koran.ac.jp

**概要**：多くの学生がほぼリアルタイムで SNS を利用している。この様な学生に、SNS を自分の生活向上に資する利用方法を考える機会を提供するために、シェリー・タークルの TED TALK とそれに対する意見交換を行った対談記録を題材としたワークを構築し、実施した。ワークの結果から、大半の学生が SNS の利用で、時間の有効活用や他者と緊密に繋がった人間関係に問題を感じていることが分かった。その様な状況にもかかわらず、多くの学生は SNS の利用をやめられずにいる。その主たる原因として、SNS にはユーザーの行動履歴を記録する仕組みが搭載されており、そのデータがユーザー間の人間関係の距離を解釈する装置としてユーザーに機能することが知られている。それに加えて、SNS でかけがえのない成長体験と、それに伴う日常生活の具体的な改善を多くの学生が経験していることがワークで明らかになり、SNS に多くの時間を費やす一因に成り得ると推察された。

## 1 はじめに

SNS は携帯端末の発達と相まって、日常生活やビジネス、他に完全に浸透し、情報の発信・共有・収集などの手段や形態に大きな変化をもたらした。多大な利便性や有益さを生み出した反面、社会問題も当然、引き起こしている。その例として、SNS が媒介・誘発したかのような事件も頻繁に報道されている。また、学校や家庭では、生徒（子供）の SNS の利用が様々な問題を生み、教師や保護者には新たな教育や子育ての悩みを提供している。

著者は福岡市にある短期大学に勤務している。本学でも休み時間だけでなく、授業中にも SNS に時間を費やす学生を見かける。また、多くの短大・大学のシラバスにも、授業中の携帯端末の操作を禁じるなどの注意書きを散見する様になったことは、SNS の利用が高等教育の現場でも共通した問題となっていることの証拠といえる。

上記の様な学生を目にすると、コンピュータサイエンスと心理学を専攻したマーク・ザッカーバーグの「人間とは本能的に繋がりたい生き物なのです」という言葉<sup>[1]</sup>を借りるならば、携帯端末と SNS という組み合わせが実現可能にした「他者と緊密に繋がった状態」に、その根源的欲求がトラップされているかの様に思える。ここでは、繋がる主体的な必然性が無いにもかかわらず、漠然と繋がっているというニュアンスでトラップという言葉を用いたが、他方、繋がることはあくまで手

段として、当人の学生生活、他の向上に資するような行為が主体であり、それを目的とした効率的な情報発信や情報交換のための利用であれば、結果として、その行為から得られる健全な意味での承認欲求や自己肯定感の充足度合も、これらのテクノロジーを介した他者との効率的な繋がり度合に比例してもたらされるであろう。

上記でトラップされたと表現した利用方法を濱野智史氏は「コンサマトリー」（自己充足的）な利用、後者を「インストゥルメンタル」（道具的）な利用と呼んでいる。<sup>[2]</sup>また、シェリー・タークルは TED TALK:Connected, but alone?<sup>[3]</sup>で、前者を「I share therefore I am」（繋がる、それ故に私は存在する）と表現している。また、電話が主たる通信手段だった時代と現在をわかりやすく対比させて、前者を「I have a feeling, I want to make a call.」（何かを感じたから、電話をしたい）、後者を「I want to have a feeling, I need to send a text.」（何かを感じたいから、メッセージを送る）と例えている。

上記のような引用しなくても、大別すると、少なくとも、そのような二種類の使用目的が SNS のユーザーにあることは感覚的に理解できる。ここで、重要なのは、タークルの TED TALK でも同様の趣旨のことが述べられているが、人間にとって、「他者と緊密に繋がった状態は未経験である」「それをどのように利用すべきか、これから考

えなければならない初期段階にある」ということである。つまり、SNS は、人間にとっての正負いずれの側面も加速させることのできるアーキテクチャを内包したテクノロジーであり、その事実を客観的に認識すると共に、有益な利用方法について誰もが考える必要があるということである。

本稿では、上記のような内容を目的として、著者の所属学科の授業で実施したワークについての結果報告とそれに対する考察を行う。まず、2 節では、SNS をアーキテクチャという視点から捉える。次に、3 節では、授業で実施したワークの内容を説明する。4 節では、実施したワークの結果についてまとめ、最後に 5 節では 4 節の結果について考察する。

## 2 SNS に内包されているアーキテクチャ

SNS はコミュニケーションを促進する媒体であり、その本質とも言うべき機能を、アーキテクチャという視点から論じてみたい。特に、日本特有の事情で発達したといわれている mixi と LINE の関係性について考察する。

### 2.1 アーキテクチャ

アーキテクチャは、ローレンス・レッシングが著書「CODE」[4]で導入した概念であり、人間の行動を物理的・技術的に規制する方法のことである。そこには、規制される人間がその規制の存在に気づかず、自覚がないままに、いつのまにか規制された状態に方向付けられているということも付け加えられている。また、アーキテクチャと同義な概念として、環境管理型権力という言葉が東浩紀氏により用いられている。[5]アーキテクチャの概念において、規制を監視と読み替えると、やはり、その監視方法が社会基盤と複合化して、監視されている人間はその監視自体に気付かないような監視システムのことをデビッド・ライアンはアセンブラージュと呼んでいる。[6]2.2 では、濱野氏が参考文献2で述べた mixi に内包されているアーキテクチャを参考にして、LINE のアーキテクチャについて論じたい。

### 2.2 mixi と LINE のアーキテクチャ

授業で実施したワークの前準備として、受講者の SNS のアカウントの保持状況と利用頻度、ならびに利用目的をアンケート調査した。結果は付録 A の表1と表2の通りである。受講者に人気の SNS は Twitter と LINE であり、特に LINE は全員が

アカウントを保持している。つまり、インフラと呼ぶに相応しい状況である。また、大半がリアルタイムに近い利用状況であることも分かった。この LINE の利用状況を誘導しているアーキテクチャについて、以下 mixi と比較しながら考えてみたい。

2000 年代前半には、Google 検索が web サイトへのアクセスの標準的な手段となった。Google の検索対象となるブログや掲示板などには、検索結果から、興味・関心は同じでも、立場や背景、精神構造などの異なるユーザーが辿り着き、そこで混在してしまうことで、意義のあるコミュニケーションが成立しなかったり、スパム的な書き込みや荒らし的な行為が横行したりしていた。このことは、日本特有のインターネット事情であるといわれている。

同じころ mixi が多くのユーザーを獲得した原因は、主としてユーザーの新規登録には、既にユーザーとなっている人からの招待が必要であるという、招待制度が存在したことにあるといわれている。このことで、mixi 内では、ある程度の良識や礼儀作法を兼ね備えたユーザーのみが存在し、快適なコミュニケーションが成立するという不確かな安心感がユーザー数を伸ばした。濱野氏は、以上と同様なことを参考文献2で述べ、このユーザー動向のことを「グーグルからの逃走」と呼んでいる。

また、濱野氏は、mixi の日記の閲覧者履歴である「足あと」と「最終ログイン時間」の機能が複合することにより、コンサマトリーな利用にユーザーを方向付けるアーキテクチャになっていることについて、『つまりミクシィはさまざまな行動履歴を自動的に記録し、観察可能にすることで、人間関係の「距離感」という曖昧なものを認識し、評価し、解釈し、推察するためのリソース（資源）を提供してくれるアーキテクチャなのです。』と説明している。

濱野氏の説明を LINE に当てはめてみると、LINE は Google の検索対象ではないし、「トーク」や「グループトーク」の主な機能である LINE は mixi よりも強い「グーグルからの逃走」を果たしているといえる。また、メッセージごとの「既読マーク」とそのタイムスタンプは、mixi の「足あと」以上に強力な行動履歴の記録とその可視化装置であることは明白である。加えて、スタンプと

呼ばれるユーザーの感情を簡潔かつカジュアルに表現してくれるアイコン的なツールも存在する。感情表現をする上で通常、考慮すべき各要素に費やす時間や労力、配慮がスタンプを利用することで軽減され、コミュニケーションは大いに促進される。つまり、LINE は mixi のアーキテクチャをより強力にした存在であり、受講生がほぼリアルタイムに LINE を利用している表 1 の状況こそが、それにより方向付けられた（規制された）現象といえよう。

### 2.3 SNS が引き起こす諸問題

2.2 では濱野氏の説明を引用して、mixi と LINE のアーキテクチャの関連性を述べた。mixi の後に台頭した Twitter や Facebook、LINE、他の数多くの SNS には、既読マークほどの明確な行動履歴ではないにしても、ユーザー間で投稿に賛同する、例えば Facebook での「いいねボタン」のような機能と、「最終ログイン時間」を表示する機能や、ユーザー間でオープンならびにクローズした形式でメッセージ交換する機能と、その更新をリアルタイムに通知する機能、他が概ね備わっている。それらはコミュニケーションを促進すると同時にユーザーの行動履歴を記録する装置であり、現段階では、その表裏一体こそが SNS の本質であるといえよう。したがって、2.2 で述べた SNS が人間関係の距離感を計測する機能を帯びていることと、その計測データから感じる正負の両面の感情・情動は、それ自体が SNS の本質的ともいえるアーキテクチャにより加速されたものであることを、2015 年現在では、肌感覚で大勢のユーザーが日常的に感じていることであろう。

他方、SNS を運営する企業側の視点では、ユーザーのアクセス回数と滞在時間を延ばし、そこでの行動履歴をデータとして蓄積することがビジネスの基本であるので、当然、それを促進するような仕組みを様々に準備しているわけである。

SNS の機能解説やビジネス利用、利用上のセキュリティ対策の書籍は既に数多くあったが、SNS でのコミュニケーションが一因もしくは、SNS 自体が手段となって、いじめや事件に至るケースを紹介・解説する書籍[7]や、SNS の利用に関する日

常生活での諸事情や諸問題[8]、教育目的[9]の書籍もここ 2~3 年で増えたように思われる。つまり、SNS がインフラ化し、それだけ日常生活の隅々まで浸透している証拠であろう。

## 3 ワークの内容と実施方法

この節では、タークルの TED TALK とそれに対する 7 名の対談記録[10]を題材として、平成 25 年度および 26 年度に著者の所属学科の授業において、受講者に対して行ったワークの内容とその実施結果について述べる。ワークは前半と後半の二部構成となっている。

まず、SNS が実現している「他者と緊密に繋がった状態」は人間にとって未経験の出来事であることを理解してもらい、それが日常生活に与える影響や有益な利用方法を自分自身で考えていく必要があることを認識してもらう。次に、どの様に SNS を利活用することが、自分の生活向上に資するのかを考えてもらうとともに、もし、日常生活に悪影響を与えているのであれば、各受講者の利用状況や、SNS に対する考え方の多様性を共有することで、そこから脱却することを考える契機を提供することを目的としている。

### 3.1 前半のワーク

2.2 で述べたように、ワークの前準備として受講者にアンケートを実施し、その結果を公開して、受講者の大半はほぼリアルタイムに SNS を利用している状況にあることを印象付けた。

前半のワークでは、そのような受講者に対して、まずは、タークルの TED TALK を視聴させた。内容の理解を促すことを目的として、トークの内容の要約文を著者が作成し、それを、いくつかの箇所を穴あきにした資料を配布した。視聴後にそれを埋めさせた後に、回答と解説を行うことで、更に、受講者の十分な理解を目指した。

次に、タークルの TED TALK に対して 7 名が意見交換した対談記録を受講者に配付し、以下のような設問を課した。

- ・登場人物が述べた意見に対して、受講者に賛成／反対の立場を明確にさせて、その理由や意見を記述させる。
- ・ある登場人物が別の人物に対して質問をした内容を、質問された人物の代わりに受講者に回答させる。その際、賛成／反対もしくは YES／NO を明確にさせ、その理由も記述させる。

このような設問を合計で 7 問設定した。また、提出後は回答を集約して公開すること、それが後半のワークの題材になることをあらかじめ説明していた。

### 3.2 後半のワーク

後半のワークは、前半のワークでの回答を集約した資料を公開するところから始まる。ここで、各受講者は番号で識別されており、その番号に対応させて、各受講者の回答が整理されている。

まず、公開された全受講者の回答を平等に熟読した後には各受講者は大きく分けて次の二つ課題を行う。7つの各設問の回答に対してそれぞれ以下のことを行う。

- ・全回答の中から「自分と一番似ている意見」を一点選出する。
- ・全回答の中から「自分が最も興味・関心がある意見、自分とは違う新しい考えの意見」に該当するものを一点選出する。また、どの個所をその様に思うのかを明確にし、何故そのように思うかという理由を記述する。

もう一つは、以下の通りである（付録 B を参照）。

- ・前半のワークの中で設けていた設問で、全員が YES と回答したものがあつたので、それをさらに発展させた 2 つの設問に回答する。
- ・最後にワーク全体で触れた様々な意見に対する考えと、これから SNS をどの様に利用していくべきなのかを述べる。

前半のワークと同様に、提出された課題の回答は集約し、後日、受講者間に公開することをあらかじめ説明した。

## 4 ワークの実施結果

この節では、3 節で説明したワークの実施結果をまとめると共に、若干の考察を加える。

### 4.1 前半のワークの結果に関するまとめ

前半のワークの参加者は 29 名で、タークルの TED TALK に対する 7 名の対談記録中に、以下の設問に関連する内容の話題や意見が提供されたり、質問がなされたりしているのを利用して、設問を課した。簡潔にその内容と結果をまとめる。

**設問 1** 授業中に SNS を利用することは賛成か反対か。

**回答** 賛成：9 名 反対：20 名

**設問 2** 友達と会話をしているときに、話しが面白くなければ、聞き手に SNS を利用しながら話しを聞かれてしまうことに賛成できるか反対か。

賛成：6 名 反対：23 名

**設問 3** 携帯端末を頻繁に利用する理由。

**回答** 他者とのつながりを求める（寂しい）という記述が含まれている回答は 6 名、それ以外の理由は、情報収集、暇つぶし、習慣、着信確認、など。

**設問 4** SNS で繋がっているユーザー数が変化すると、発信できる意見や画像がどんどん限定されてしまうことは、SNS での特殊事情か、現実の世界と変わらないか。

**回答** 現実の世界と変わらない：10 名 SNS 上での特殊事情：19 名

**設問 5** 食事を誰かと一緒にしている時に、食事と目の前の相手に集中することが自分にとって良いか、それとも目の前の相手とも、SNS でそれ以外の人も繋がりがながら過ごすことが自分にとって良いか。

**回答** 食事と目の前の相手に集中する：25 名 相手による：2 名 SNS をしながらの方が良い：2 名

**設問 6** SNS を利用せずに一人の時間を確保することは大切か。（付録 B）

**回答** 全員が YES

**設問 7** SNS を利用する回数が増えていくと対面でのコミュニケーションが下手になって避けるようになるか。

**回答** 利用頻度と無関係：12 名 下手になり避けるようになる：17 名

また、上記の設問では、いずれもその様に回答する理由を求めた。そこから読み取れる傾向や特徴的な理由を以下紹介する。

設問 3 で SNS を頻繁に利用する主たる理由は、情報収集や暇つぶしというものであり、テレビを娯楽や情報収集のために見るのと近い状況にあると感じられた。他方、繋がりを求めるという理由も存在し、その点は、テレビ放送という一方向的なメディアとの決定的な違いといえる。

設問 6 では全員が YES と回答していたが、その理由の大半は、「SNS を介して他者と緊密に繋がった状態にストレスを感じる」「自分と向き合い、考えを整理する必要がある」というものであり、時間が有効活用できていないという理由は少数であった。しかし、これは質問に至る文脈が原因であることが、後半のワークから分かった。

設問 7 で、「下手になり避ける様になる」という回答をした受講者の中には、タークルが TED TALK で指摘する危惧に該当する以下の様な理由を述べる者もいた。SNS では「返事をゆっくり返せばよい」「メッセージの修正・削除が可能」「表情が分からないので共感や理解が難しい」。また、「対面では言葉がスラスラ出てくるか不安」「対面でのコミュニケーションは表情が分かり、気を使ったり、相手に合わせたりするけど、SNS はそんな必要がなく気楽」なども見られた。他方、「利用頻度と無関係」と答えた受講生の理由の中に、「SNS を利用しだしてからの方が、実生活でのコミュニケーションが増えたから」という理由も存在した。

#### 4.2 後半のワークの結果に関するまとめ

後半のワークに参加した受講者は 22 名であった。はじめに、前半のワークで設定されていた 7 つの設問の回答を集約し、それを受講者間に公開することで、意見の相互批評をすることを行った。この詳細は割愛するが、最後の設問（付録 B の設問 3）でこの相互批評が受講者に役立ったことが明瞭に伺えた。

次に、前半の設問 6 の回答結果を利用して、付録 B の設問 1、設問 2 へと発展させた。

設問 1 では、SNS の利用により、「時間の有効活用ができなくなっている」「緊密に繋がった人間関係にストレスを感じている」などの問題が明らかになった。

設問 2 では、20 名が SNS の利用を通して「これまでに得られた成長があった」、19 名が「将来成長に繋がることがありそう」と回答しており、大半が SNS の利用が自分の成長に資すると思っ

成長と感じている様である。それ以外には「SNS を利用したことで現実のコミュニケーション力が改善された」「ソーシャルメディアで効率よく打ち合わせができた」なども回答されている。

ワークの最終となる設問 3 では、大半の受講者が SNS の利用時間と一人で何かをするための時間のバランスが大切であると回答していた。

#### 5 ワークの実施結果に対する考察

このワークを通して、半ば予想されたことではあったが、SNS は受講生の日常生活と不可分なインフラともいえるべき状況にあり、大半の受講者のリアルタイムに存在しているという事実が明確になった。

ワークの基本的な目的であった、SNS が実現している「他者と緊密に繋がった状態」は人間にとって未経験の出来事であること、それが日常生活に与える影響や有益な利用方法を自分自身で考えていく必要があること、の二点を受講者に理解させることは、タークルの TED TALK を視聴することで十分に果たされたと感じている。実際に、SNS とどの様に付き合っていくことが、自分の生活向上に繋がるかを受講者が考える実行プロセスにおいて何が重要であったかについては、ワークの結果を以下で考察した後に、本節の最後で述べる。

SNS をインストゥルメンタル的に利用しているという受講者はごく少数であった。他方、タークルが指摘するような孤独を解決するためのコンサマトリーな利用方法を強く自覚している学生も全体の 2 割程度であり、それ以外の大多数の利用目的は、情報収集や暇つぶしなどと回答しており、テレビを視聴する習慣的な行為に類似している。しかし、放送という一方向的なメディアと決定的に異なる点は、携帯端末の電源を切らない限り、自分から SNS にアクセスしなくとも、他者からのプッシュ通知が生じるころであろう。受講者の大半は、一人になる時間の確保や他者と緊密に繋がった状態にストレスを感じており、このことは、上記のテレビに対する習慣的行為とは明らかに異なる。つまり、2.2、2.3 で述べた、SNS の本質と

もいうべきアーキテクチャである人間関係の距離感を計測する機能に、肯定的な自覚がない状態でトラップされていると思われる。

また、タークルが TED TALK で指摘しているような対面でのコミュニケーションにリスクや煩わしさを感じて、SNS でのコミュニケーションを優先させてしまおうという受講者も一定数いることが分かった。また、それらの受講者の中には、将来社会人となった場合に、自分のコミュニケーション能力が不安であることを述べている。

後半のワークでは、大半の受講者が SNS を通じて成長できたということを明言していた。このことは、2.2 で述べた「強いグーグルからの逃走」が SNS で完全に成立しており、その有益さを多くの受講者が享受している明確な証拠であろう。対談記録の中で、伊藤穰一氏は、個性的な考えを持つような成長段階の子供にとって、自分に対する周囲の肯定的でない評価・意見だけに囲まれてしまうことで、自己否定的な考えに至ってしまう危険性を、SNS の先にいる自分と似た境遇のユーザーの存在や、そのユーザーが実現している幸福な生活を知ること回避できる可能性は、SNS で受ける悪影響よりも相対的にメリットがあるだろうと述べているが、まさにその様なことを自分の成長であると回答している受講者も一定数存在した。

著者は、SNS に多くの学生がトラップされているかのような生活を送っているのは、1 で述べたように誰かと繋がりたいという人間の根源的欲求とそれを加速させる SNS に内包されているアーキテクチャが主たる原因であると予想していた。この事実はおそらく間違いないと考えられるが、それに加えて、SNS で単に、生活空間に存在しない人との出会いを経験できたことや、その様な人々からの情報提供で知識が増えたり、視野が広がったりという範疇を超えて、自分の人生にとって、かけがえのない成長体験とそれによるリアルな日常生活での、なんらかの具体的な改善を経験したという事実が多くの受講者に存在していることが分かった。そして、それがトラップされてい

る原因の一つに成り得るのではないかと推察する。

後半のワークの最後の設問では、多くの学生が SNS の利用時間と自分一人の時間とのバランスが大切であることを回答していた。それに以外には、SNS で得た情報や経験を実生活にいかにより有益に利用していけるかが大切であるという回答も一定数あり、まさに上記の推察を支持する記述であるといえる。

このワークでは、タークルの TED TALK とそれに対する 7 名の対談記録、ならびに、それらに関する設問の全受講者の回答という、極めて多くの意見や考え方に触れる機会を提供するということが終始した。ワークの最後まで、著者が最良だと思える結論を受講者に伝えることは一度もしなかった。何故なら、それほどまでに SNS は受講者の日常生活や人生、根源的欲求など、様々な本質的なところにまで入り込み、そこで体験は画一的なものでは無いと推測されるからである。本稿の主題である「ソーシャルメディアで緊密に繋がった人間関係について考える教育」を試みるに際し、何が有効な手段であるかということについて、このワークを通して得られた知見は、自分の隣の受講者が SNS に対して、いかに同じような問題や悩みを抱えており、また、全く異なる考えを持ち、様々な体験をしているかということを中心に引き出し、それを共有することである。また、SNS には人間関係の距離感を計測する機能が仕込まれているという趣旨の説明はこのワークでは敢えて実施しなかったが、それはあまり有効ではないだろうと考えている。何故なら、2.3 で述べたように、その様なことはおそらく肌感覚で理解しており、それでも SNS に多くの時間を費やしているというのが実情であると推測されるからである。

## 付録 A SNS の利用状況と用途に関するアンケート調査

平成 25 年度と 26 年度にワークの前準備として、著者は SNS に関するアンケート調査を合計

	暇があれば常に	毎日数回	1週間に数回	ほとんど利用しない	利用していない
Twitter	23	3	2	1	3
Facebook	2	5	5	4	16
LINE	19	12	1	0	0
Mixi	0	1	0	12	19

表 1：所有しているソーシャルメディアのアカウントと利用頻度（単位：人）

自分の思ったことをメッセージとして発信するため	22
自分の日常の出来事を写真や動画に記録して発信するため	19
用事があって連絡をとるため	22
友達と会話（メッセージ交換）をするため	15
友達がアップロードしている情報（メッセージ、画像、動画など）を見るため	24
有名人や著名人が発信する情報をキャッチするため	17
現実には会ったことが無いが、ソーシャルメディア上で知り合いになり、その人とコミュニケーションを取ったり、その人が発信する情報をキャッチしたりするため	11
現実には会ったことが無く、ソーシャルメディア上でも友人関係にないが、自分が興味・関心のある人がソーシャルメディアをやっている、その人が発信する情報をキャッチするため	9
上記以外の情報収集をするため	24
ゲームをするため	5

表 2：ソーシャルメディアの利用用途（複数回答、単位：人）

32名に実施した。内容と結果は表1と表2の通りである。

## 付録 B 前半のワークの設問 6 と後半のワークでの設問

前半のワークで対談記録の中の登場人物が述べた意見に対して各受講者が自分の意見を述べる設問を設定した。その一例を以下に示す。[10]

**設問 6** シェリー・タークルが「ソーシャルメディアやメールをしない時間を作ったり、一人になる時間を作ったりする必要がある」ということを主張していることが紹介されていますが、入谷聡さんや伊藤穂一さんもアンプラグドになる時間やディスコネクトすることの必要性に賛同しています。あなた自身は、「一人になる時間を作ったり、そのために一人で過ごすことのできる力を身に付けたりすること」が自分にとって重要だと考えますか。どちらかに○を付けて、その様に考える理由を述べなさい。

( ) YES ( ) NO

この設問に対して平成 25 年度および 26 年度の受講生 29 名全員が YES と回答した。それを受けて、後半のワークで以下の設問へと発展させた。

**設問 1** 前半のワークで、「一人になる時間を作ったり、そのために一人で過ごすことのできる力を身に付けたりすること」が自分にとって重要だと考えますか、という設問に対して、全員が YES と回答していました。そもそも、一人の時間の時にしかできないことは結構たくさんありますが、その重要なことの一つに、自分自身の成長につながる何かをすること、例えば、

- ・自分にとって重要な事をじっくり考えたり悩んだりする
  - ・自分にとって必要なことや分からないことを調べたり考えたりする
  - ・勉強したり読書をしたりする
  - ・「自分に出来ないこと」や「自分で出来るようになりたいこと」を練習する
- など、他にもたくさんあると思います。ある程度

これらに真剣に取り組むには、一人でいる時間を確保しなければなりません。このように時間を費やそうとすると、スマートフォンやソーシャルメディアでの繋がりが邪魔になったり、ついスマートフォンやソーシャルメディアを優先してしまって、そのような時間を持てなくなってしまうりしていませんか？このことについて、自分の現在の考えや状況について述べなさい。

この設問に続けて以下を設定した。

**設問 2** 上記では一人でいる時間を確保して、自分の成長のために何かに取り組むことへの、スマートフォンやソーシャルメディアの影響について述べていただきました。しかし、他の人と何か共同で作業したり、一緒に考えたりする中で自分の成長に繋がることもたくさんあります。そうすると、スマートフォンやソーシャルメディアは他人と繋がるとための最適な手段の一つと言えそうです。「これまでに、スマートフォンやソーシャルメディアを通して得られた自分の成長があったかどうか」また「将来、自分の成長に繋がることがありそうかどうか」について自分の考えに○をつけ、その様に考える出来事や理由を具体的に述べなさい。

- ・ これまでに得られた成長があった ( ) YES ( ) NO
- ・ 将来、成長に繋がることがありそう ( ) YES ( ) NO

最後に、ワーク全体を振り返る以下の設問を設定した。

**設問 3** これまで、タークルの TED TALK を見た後に、スーパーハンガアウトを読んで課題に取り組んできました。この体験で得たことに関して、以下のことに答えなさい。

- ・ あなたがシェリータークルのプレゼンテーションやスーパーハンガアウトの内容について、「考えたこと」「感じたこと」「賛成・反対」「提案」「意見」など。
- ・ 今後の自分の人生を豊かで充実したものにする

ためには、スマホや SNS をどのように利用していけばよいか。

以上の 2 点について、理由を明確にして述べよ。

#### 参考文献

[1]山脇伸介、Facebook 世界を征するソーシャルプラットフォーム、ソフトバンククリエイティブ、2011 年。

[2]濱野智史、アーキテクチャの生態系—情報環境はいかに設計されてきたか、エヌティティ出版、2008 年

[3]Sherry Turkle, TED TALK:Connected, but alone?, [https://www.ted.com/talks/sherry\\_turkle\\_alone\\_together](https://www.ted.com/talks/sherry_turkle_alone_together), 2012 年。

[4]Lawrence Lessig, CODE AND OTHER LAWS OF CYBERSPACE, Basic Books, 1999 年 (CODE—インターネットの合法・違法・プライバシー、翔泳社、2001 年)

[5]東浩紀、中央公論 (情報自由論第 3 回 規律訓練から環境管理へ)、中央公論新社、2002 年。  
<http://www.hajou.org/infoliberalism/3.html>

[6]David Lyon, Surveillance Society: Monitoring Everyday Life, Open University Press, 2001 年 (監視社会、青土社、2002 年)

[7]例えば、高橋暁子、ソーシャルメディア中毒つながりに溺れる人たち、幻冬舎、2014 年。

[8]例えば、Danah Boyd, It's complicated the social lives of networked teens, Yale University Press, 2014 年 (つながりっぱなしの日常を生きるソーシャルメディアが若者にもたらしたもの、草思社、2014 年)

[9]例えば、竹内和雄、スマホやネットが苦手でも指導で迷わない! スマホ時代に対応する生徒指導・教育相談、ほんの森出版、2014 年

[10]入谷聡、長村ひかり、古賀健太、新清士、伊藤穰一、金谷美加、久保田大海、スーパーハンガアウト of シェリー・タークル on Google+, 2012 年。  
[http://www.nhk.or.jp/superpresentation/hangouts/hangouts\\_121126\\_report\\_1.html](http://www.nhk.or.jp/superpresentation/hangouts/hangouts_121126_report_1.html)